

第二幕、いやここからは第三幕である。予定では、十六時終了が目標。何らかの結論、落としどころを示すための大事な幕。大方の予想はついている。それでも、全員が納得の行く合意が得られることが肝要。対立の構図を残さず、うまく幕引きできればいいのだが・・・。「さて、どうやら要らない派の方が増えた気も致しますが、要る派の方もいらっしやいます。これまでの議論を踏まえて、ご意見なりコメントなり、いかがでしょうか。ではまず、要る、の方」

要る派の意見として出たのは、遊び場や憩う場とするなら安全面は確保すべき、との積極的理由と、あって悪いものじゃないから、といった消極的理由。要らない派についてはあえて聞くまでもないところだったが、特に強く主張されたのは「進め方が良くない」という点だった。プロセスマネジメントにも、今回の実験話は問題ありと見ていた千歳だったが、同じように見る向きは来場者にもあった訳だ。心動かされるも、心境は複雑。こうなると、自然再生論やシステム論をいくら積んでも、河川事務所（せむい）の所為や作為を根本的に変えるには至らない可能性が出てきた。ここは結論を急がない方がいいかも知れない。

中間派の席は会場中央にはなく、第二幕開始時とは逆方向に大きく傾いていて、八広も緑も依然そこに居る。代表して八広が云うには、「とにかく皆で現場検証してから、じゃないですか？」 緑のおば様も小首を振っている。

明日はその検証日に当たる訳だが、方向性は決めておいてから臨みたい。検証結果によっては変更あり、としながらも、この時点での暫定合意案としては、

1. ヨシ原の一部は復元する（崖崩れを修復することで、干潟の安全を保つ）
2. 干潟は原則ノータッチ（本来の姿を尊重する）
3. 漂着ゴミは受け容れる（とにかく回収・分別等続ける、抑制・予防も考える）

となり、消波実験はひとまず凍結することとなった。これで一件落着には違いないのだが、この合意形成の過程で、思いがけず新たな論点が浮き上がる。プロセスの読み違い？と言っではマナージャーに気の毒だ。こつした対話の場においては、むしろ必然。それだけ議論が活発になっている、ということである。消波以前に増水時の対策が先ではないか、引き波禁止の指定はできないのか、干潟に通じる道を整備する（クリーンアップをしやすくする一助）のは、やはり人間都合になるのか・・・

何とかコーディネーターっぽくまとめてきた千歳だったが、こつも話が分岐してくると、

さすがに收拾がつけにくい。スクリーン上には辛うじてその三点が表示されているが、解決案を書き足す予定の右向き矢印が付されたところで膠着している。一つ一つディスプレイを覗き込んでいくか。

「これらの論議は、消波実験の要否とは切り分けて、河川事務所としての見解をまず伺う、ということでは、よろしいでしょうか、ね」

「来館当初の威勢の良さが失せて、ローテンションなトーチャンである。是非は問わないので、ただ思うところを述べてほしいだけ。だが、萎縮してしまうと口も開けにくくなるもの。」「そう、ですね。今夏のような増水があると、消波も何もありません。正に水系全体で考えないといけません。いわゆる治水に関しては公共事業が欠かせない訳ですが、自然再生と対立する面が出てくるので、なかなか・・・今はわざと氾濫させるのも治水のうち、という考え方も出ていますが、現実問題、『あるがまま』ってことでは通用しないんですけど」

「このくらい弱気な方が同情も得られるというものである。先生はこの答弁を受けて、」「いや、川つてのは生き物なんだから、そういうリスクはつきものさ。昔からそこに住んでいる人間だったら、それは当たり前として受け止める。人がいい気になって、川をコントロールしようとするから役所も苦労するんだ。川の動きに合わせて人も動けばいい。ま、氾濫しやすい場所をわざと造る手もあるけどな」 穩便に返すのであった。

引き波禁止については、他の箇所も含め、再度検討すると言う。干潟へのアクセスについては、明日実地を見てから、と相成った。冬場はヨシも減退しているから、あえて整備するでもなからう、というのが大筋の見方ではある。

終了予定時刻まで、あと十分余り。通常ならこの辺りでまとめに入れば丁度いいのだが、「進め方が良くない」の件が引っかかっていた千歳は、まとめ代わりに新たな問題提起を試みる。

「さて、本来でしたら結論の確認に入るところですが、少々お時間をいただいて、違う角度から今回の実験話の背景を探ってみようと思います。お題はちょっとシビアかも知れませんが、こんな感じで」

大寫しになったのは、何と『なぜ、役所が良かれと思ってることは、理解が得られにくいのか』。これには石島氏も付き人も苦笑せずにはいられない。第二幕から第三幕の間に退席した客は数人いたが、この場ではそれはなし。会場はどこからともなくどよめきが生きてくる。

同情ついで、という訳ではないが、この際、石島課長の気が済むように、もつと突っ込んで話を聞こう、という千歳ならではの配慮である。こうした探りはインタビュー経験が生

きるようだ。早々に切り出してみる。

「進め方についてのご苦言がありました。私見を述べさせてもらつたら、プロセスが示されないうちに、既成事実のように進めてしまつ、それが一因ではないかと。体質的な要素も大きいように思います。どうでしょう？」

「まあ、予算枠にちよつとした空気がございまして、それなら、という感じでした。下半期に入つてましたので、今年度中となると急がないといけません。拙速つてヤツですね」

自戒気味に答える課長である。肩の力が抜けている分、今は滑舌である。

「あのあ、例えば新しいものを造る方が手つ取り早いとか、点数を稼ぎやすいとか、そういうのってどうなんですか？」 八広がさらに突っ込む。記者会見のようなノリになってきた。

「そつという連中もいるにはいます。でも、小職の場合はちよつと動機が異なりまして、そのお・・・」 再び言い淀んでしまった。

「お差し支えなければ、教えていただけませんか。記憶には残るでしょうけど、記録には残しませんから」 会場は心なしか和んでいる。話をしやすい空気を作るのもインタビューのお役目である。

「公務員の分際で誠に面目ないのですが、それでも娘が二人おりまして、姉妹そろつて当の干潟を大いに気に入つておるんです。長女は干潟の話題をきっかけに会話してくれるようになりましたし、次女も原体験が良かったのか、元氣を取り戻しました。それで、娘たちがもっと安全かつ快適に過ごしてもらつにはどうしたらいいだろう、って、ま、勝手な親心なんです、ね」

私情を挟みたくても挟めない、公務員の悲哀を感じさせるエピソードである。千歳はまさかこんな裏話があるつとは予想もつかなかったので、ちよつとしたお手柄ながら、拍子抜け。清と縁がパチパチと手を打つと、拍手は会場全体に広がった。インタビューに向けられた分もあるだろうが、娘を想つトーチャンへの賞賛が主であることは疑いない。

「何だよ、いいところあんじゃなか。それを先に言つてくれなくちゃ、な」

櫻も思わず声を上げる。

「石島さん、姉妹には伝えたんですか？」

「まさか。親の情はさりげなく、です。ダメですかね？」

「じゃ私がいずね。明日ご一家でお越しになれば話は早い気もしますが、あ、お姉さんは受験勉強中でしたな」

「八八、勘弁してください。今回は凍結になつちやつた訳だし、お恥ずかしい限り」

「いいんですよ。その気持が大事。確かにお伝えします。トーチャンの話、良かったよつ」

前の席にいた石島課長と掃部先生は、プロジェクトの光を受けながら、握手を交わす。どこまでどう合意形成が図れたのかよくわからなかったが、終わりよければ何とやら。千歳は最後に、「長々とありがとございました。もう一度、よき父、石島湊さんに大きな拍手を」と締めることで、まとめとした。河川行政がこれで変わるかどうかは定かではないが、担当者のお話を掘り下げて聞くことの重要性が認識できたのは大きい。

「という訳で、明日も今日と同じ一時半から、場所はその干潟になりますが、続きを行いたいと思います。検証が済んだら、実態調査を兼ねたクリーンアップをします。軍手、レジ袋をお持ちの上、濡れても平気な靴でいらしてください。石島姉妹は来られないかも知れませんが、二人のためにも安全・快適な環境にしていこうと思います。ちなみに隅田氏はクリーンアップの発起人、私、千住はリーダー役をしております。今日は仲介役という立場上、二人とも発言を控えておりましたが、明日はしっかり議論に加わろうと思いますので、よろしく願います！」

南実の潮時情報により、十二月のクリーンアップは午後開催というのが前々から流れていた。小梅は塾のため参加見送り。トーチャンズの試合予定はないので、父君は出て来れる見込み。ま、とにかく明日、である。

予定よりオーバーしているが、十六時十五分を回ったところで、文花事務局長より事務連絡が入る。センターの活動をサポートしてもらったための会員募集（仮入会）の件、ついでに創設準備中の運営団体名NPO法人正式名称（募集の件、環境ナビゲーションサイト「KANA」のPR、そして、

「今日の討議で話がありました、ゴミを減らす協議については、来年一月十二日午後の開催を予定しております。その後も地域課題解決イベントのようなものを毎月第二土曜日に定期開催していくつもりです。皆さんどうぞよろしく」

「って文花さん、いつの間にか？」

「今、思いついたの」

「あのお、プロセスが不透明なんですけど」

「ま、皆さん、こういふことがないように、って。悪いお手本でした。失礼」

「せっかく温まったのに、今のでヒヤッとしてしまいました。おっと、おあとがよろしいかい」

いつもの掛け合いを以って、無事終了。拍手はしばらく続く。起立して頭を下げていた千歳はそのまま動けずじまっていた。

湊、文花が握手を求めて近づいてくる。ちょっといいシーンである。

閉館まではまだ時間があるので、理事と運営委員の新候補各位、清、緑、八広、文花が議論の続きをしている。特に新理事のお二人は質疑で活躍したこともあり、言動に注目が集まる。今は脱ハコモノ論に興じているようだ。

「議論を現場に引き継ぐつてのは、何かこう突き抜けた感じでいいスね」 八広が寸評を入れると、

「必ずしもハコがなくても、つてこと。人が集まればそこで何かが生まれる、それも現場で、現場を焚き付けることで地域が元気に、かな？」 文花が軽くまとめる。

「でも、おふみさんはハコ入りなんだろ。ハコがないと困るんでないの？」 先生がからかうも、

「いえ、ハコは卒業です。これからは私も外に出ます」 見事な宣誓で答えてみせた。事務局長にこう言われては、他の面々も動かない訳には行かない。在来の、あるがままの環境を守る、サポートは最低限、これは川に限らず、どんな自然環境に対しても当て嵌まりそうなこと。明日はひとまず身近な干潟でそれを確かめることになる。

という訳で、会議スペースでは八人が雑談中。南実は一人円卓で、Goonブログを見ながら議論のおさらいなどをしていたが、未だコメント投稿機能が付いていないため、もどかしさが募るばかり。論文ネタを探すことを思いつくと、下の図書館へ。センター閉館まで文花を待つことにした。カウンターにはいつもの二人。一応、明日の段取りなんかを打合せしているのだが、

「やあやあ、隅田くん、今日はご苦労でした」

「八八、まともが今ひとつ、でしたが」

「いやいや、立派なもんですよ。さすがはマネージャー殿つて感じ。惚れ直しましたワ」 脱線しているような、そつでないような・・・ 千歳は温まるどころか熱くなっている。

櫻は顔が火照っている。勤務時間中というのが悩ましい、いや恨めしいお二人さんなのであった。